

### 三酔人経綸問答

日本政府が尖閣諸島の国有化を決めて以来、中国国内では各地で大規模な反日デモが繰り広げられ、一部では暴徒化して日本大使館や日系企業などに甚大な被害をもたらしています。

また、9月18日は、満州事変の発端となった柳条湖事件が発生した日であり、この日は毎年中国国内で反日デモが行われていますが、今年は尖閣問題と絡んで、一段と大規模なデモが100を超える都市や地域で行われ、瀋陽の日本総領事館の窓ガラスが投石で割られるといった被害が出ています。

中国政府は、デモを容認するだけでなく、多数の漁業監視船等を尖閣諸島付近に進出させる等、日本に対する圧力を強めています。

こうした中国政府の姿勢は、これまで日中双方の友好関係の構築に努力してきた多くの先人達の努力を無にするものであり、誠に残念な事だと思っています。また、チャイナリスクという言葉があるように、中国での事業展開が非常に大きなリスクを伴うものである事を、改めて如実に示す結果となっています。

中国政府は、強力な経済力や軍事力、更には、強かな外交力によって南沙諸島の領有を進めており、それと同じ事を尖閣諸島でも行おうとしているように見えます。それらの行為は、日本のみならず東シナ海周辺の諸国にとって、大きな危機と映るのは致し方ありません。

尖閣諸島については、1895年に正式に日本の領土に編入されたものであり、一時期は日本人が居住していたこともあります。

中国が尖閣諸島の領有を主張し始めたのは、東シナ海に石油埋蔵の可能性が指摘された1970年代以降に過ぎず、仮に中国側に主張し得る事があるとしても、それは平和裏の内に話し合うべきものです。

中国人の中には、日本に対し戦争も辞さずといった激しい主張もあるようですが、過剰な自信と偏狭なナショナリズムは、両国にとって決してプラスにはなりません。

今、中国国内は反日の嵐で沸騰していますが、両国の政府関係者は、今こそ冷静に、大局的観点に立って対処して頂きたいと思います。

今回の一連の騒動を見ながら、私は、随分昔に読んだ「三酔人経綸問答」を思い出しました。

この「三酔人経綸問答」は、中江兆民によって1887年（明治20年）に書かれたもので、洋学紳士君、豪傑君、南海先生という3人の登場人物が、酒を飲みつつ議論するというものです。

有り体にいうと、洋学紳士君は民主主義者で非武装中立論者、豪傑君は軍事大国を目指す国権主義者、といったところです。

そして、洋学紳士君は完全民主制による武装放棄といった理想論を展開し、一方の豪傑君は中国進出を主張するといったように、談論風発するのですが、最後に2人は南海先生の考えは如何と問い掛けます。

そこで南海先生は、「多くのばあい、国と国とが恨みを結ぶのは、実情からではなくてデマから生ずるものです。実情を見破りさえすれば、少しも疑う必要がないのに、デマで憶測すると、じつにただごとならぬように思えてくる。だから、各国がたがいに疑うのは、各国のノイローゼです。青眼鏡をかけて物をみれば、見る物すべて青色でないものはない。外交家の眼鏡が無色透明でないことを、私はいつも憐れに思っています。」と述べると共に、日本の将来の大方針について「やはりただ、立憲制度を設け、上は天皇の尊厳、栄光を強め、下はすべての国民の幸福、安寧を増し、上下両議院を置いて、上院議員は貴族をあて、代々世襲とし、下院議員は選挙によってとる、それだけのことです。くわしい規則は、欧米諸国の現行憲法を調べて、採用すべきところを採用すれば、それでよろしい。外交の方針としては、平和友好を原則として、言論、出版などあらゆる規則は、しだいにゆるやかにし、教育や商工業は、しだいに盛んにする、といったようなことです。」と述べています（岩波文庫）。

すると2人の客は、南海先生の言葉は少しも奇抜なところがなく、そんな事なら子どもでも下男でも知っていると言います。

これに対して、南海先生は次のように反論します。

「ふだん雑談のときの話題なら、奇抜さを争い、風変わりをきそって、その場かぎりの笑い草とするのももちろん結構だが、いやしくも国家百年の大計を論ずるような場合には、奇抜を看板にし、新しさを売物にして痛快がるということが、どうしてできましようか（岩波文庫）。」

120年以上も昔の賢人の言葉は、今も色褪せてはおりません。

（塾頭 吉田 洋一）